

空



2006年

SORA 16号

晴夜 (16) | 1

柴田 佐知子

大波に灘うら返る十二月

年つまる実直といふ棒立ちも

馬磨く横顔ばかり十二月

極月の灘押し戻る大漁旗

漁師ごと島の古りゆく十二月

臘月や蟹にもらひし雑魚が跳ね

術なくて笑つてしまふ年の暮

海底に骨や青磁や十二月

―「俳句研究」十二月号より―

日記には書かず忘れず髪洗ふ

遠くまで

高倉 和子

蛤となりし雀の倦みてをり

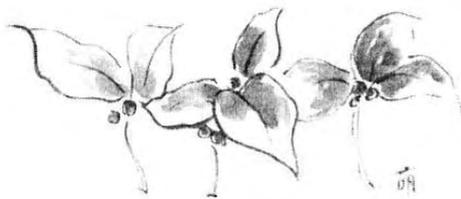
梨をむく少しざらつく音のして

秋草に埋もるるほどの標かな

祀られし幹に湿りや望の夜

爪を切る音のみありて夜長かな

かたまりて滴つてゐる曼珠沙華



秋風や回りの道のよく見えて

日に焼けし畳の色も秋思かな

立冬や光転がる屋根の上

大杉の影太りゐる神無月

爪立ちて歩く子犬や冬の朝

冬晴や砂利踏む音の遠くまで

鐘の音に汽笛の混じる寒さかな

身を削ぎて売らるる魚や十二月

冬帽の父に山なみありにけり

蘭玉

中田みなみ

すいつちよに日暮俄かな草嵐

足早に月日過ぎゆく彼岸花

暁の押し出す漆紅葉かな

かみ・しもと呼べる集落鳥渡る

吊橋を一気に走る葛嵐

鶏を呼ぶこゑや遠野の秋深し



語りべの婆が座に着き添水鳴る

庭下駄の感触月の寂びにけり

直哉忌の蛙跳んでは考へる

火恋し僧に会釈の長廊下

遠吠ゆる犬のこだまや菓喰ひ

だまされてわれは凍てたる海鼠かな

大皿割れ肝の坐りし年の暮

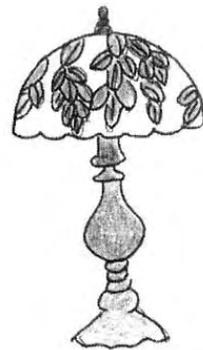
繭玉や昔の赤は淡かりし

初日記日本晴れと書きにけり

夕日なほ

荒井千佐代

きらきらと鱗粉の降る昼寝覚め
毛虫焼く人に見られぬやうに焼く
避暑地去る聖書に白き羽根を栞り
ねむごろにピアノノ拭きをり台風圏
秋の蚊一ぴき園長を振りまはす
水中花ルルドの水をすこし足す



別れ来て萎む芙蓉を見てをりぬ

旧約・新約・英訳聖書いわし雲

茱萸の実や書かねば五感衰へる

眠らむと力を抜きぬ虫すだく

オープンキャンパス秋風にカレーの香

黄落す寝墓しづかに眠らせて

鶏頭の乾いてきたる灘の風

黄泉に吾を待つは幾人秋の虹

夕日なほ留まつてゐる柘榴かな

空作品抄

柴田佐知子

蛤となりし雀の倦みてをり

高倉 和子

「雀蛤となる」は七十二候の寒露の二候。雀が大海に入つて蛤となつてしまふとは、昔のひとは自在な発想をしたものである。三月節第二候には「田鼠化して鶉となる」もある。豊かな想像力に敬意を表してこれらの季語も詠んでゆきたいと思つている。元気に飛び回つていた雀が、蛤となつて砂にじつと潜つているなんて、退屈なことであろう。「倦みてをり」と雀の気持ちを代弁してとぼけた味わいがある。

暁の押し出す漆紅葉かな

中田みなみ

夜明け前はすべて闇一色に景は沈んでいる。日の出とともにそれぞれが闇から色を取り戻してゆく。漆紅葉の紅も。「暁の押し出す」とは見事な措辞である。

毛虫焼く人に見られぬやうに焼く

荒井千佐代

木の芽を食べつくす毛虫を焼いていても、殺めているという後ろめたさがあるものだ。その機微をさりげなく

詠みとめている。

もう誰も大きをいはず種ふくべ

服部 早苗

遠山は母貝のごとし通草の実

//

種を採るために残された瓢箪。太るだけ太つて、そのままぶらさがつていいる姿を「もう誰も大きをいはず」と間接的に描写してうまい。次の句の「母貝のごとし」の比喩の瑞々しさも格別である。季語の選択に早苗さんの清新な感性がうかがえる。

仰臥のまま眉整ゆる秋思かな

苑 実耶

三ヶ月の入院治療を終え退院された。入院中は本人の希望もあり病院で句会を行った。一回目は車椅子で、二回目は杖で参加された。掲句は高熱が続き絶対安静で寝返りもうてなかつた時の作品である。〈秋うらら名前呼ばるる歌ふごとくへさはやかや歩行器恃む風の中〉と詠む作者の強い意思に感服する。

七夕や男にもある富士額

樋口みのぶ

赤い羽根つけて首相の誕生す

秋 千晴

日あたりて睫を上げし曼珠沙華

あさなが捷

眠る児はいつも万歳福寿草

小林 朱夏

誰もが見たことがある光景だと思ふ。しかしこのよう

に表現されるとまことに新鮮である。生き生きとした心の置き様が作品の精彩となつて現れるのである。

猫じやらし我が家の猫を釣り上ぐる 青木 朋子
まさに猫じやらしである。獲ろうと伸び上がる猫が見えてきて楽しい。

畦に沿ひ律儀に曲がる彼岸花 ふじの 茜
「律儀に曲がる」は面白い。畦と彼岸花という定番の取合せもこの一言で生まれ変わった。

鶏頭の毛ばだちて種こぼしけり 桜 三奈子
長き夜の民話めでたく終りけり //
種をこぼす頃の鶏頭の質感は確かに「毛ばだちて」である。「めでたく終わりけり」もうまい。

秋光やべーと呼びよせ阿蘇の牛 永原 彰子
松虫草地蔵峠を紫に //
阿蘇の牛を「べー」と呼び寄せるとは知らなかった。ゆつたりした響きは阿蘇の雄大な起伏に似合いそうである。地蔵峠は松虫草の自生地で、これは実景だとのこと。見てみたいものだ。

平のわれ課長四人と新酒酌む 荒井 太喜
初々しい新酒の句である。素直な句柄の作者、上司か

らも可愛がられておられるのであろう。

大滝に真向かふ五臓六腑かな 石川 叔子
強靱な作品である。轟轟と響く滝の前では小さく思える人間が、生身で一步も引かない力となつて存在している。五臓六腑という言葉がこのように生きて立ちあがってくることに驚く。

他にも書きたい句が多くあつたが紙面が尽きた。
海猫帰る洋上に声こぼしつづ 田島 洋子
虫時雨五百阿羅漢影五百 安武 晨子
破芭蕉手の鳴る方や法隆寺 堀江 恵子
色褪せて気楽になりし曼珠沙華 今井 春生
神発ちし鶏鳴風にあるばかり 守永ハツエ
水口に溺れてゐたる余り苗 吉村 撰護
地方紙にくるまれ届く秋果かな 川村多美子
東ねても淡さかはらぬ紫苑かな 遠山のり子
砂浴びの象に吸はるる蟻地獄 牧野 久子
吾子のやうに貫はれてゆく烏瓜 及川木栄子
石路日和朝の服葉忘れをり 小川 涼
幅五尺袋小路の秋の風 森 裕子
お手玉の音も一人や秋の夜 葉山 美香
満月や影引きずりて猫がゆく 田代 貞枝

空集

柴田佐知子選

枇杷食めば種が大きく輝きぬ
大路行く一人一人に夏果つる
秋の蚊が真夜の眠りを出入りせり
赤とんぼ宙に止まり木あるごとし
竜胆の無骨に挿してある職場
猫じやらし我が家の猫を釣り上ぐる
産終へし髪梳きにけり百日紅
五工衛門風呂ありしあたりや榎檀の実
隧道の向かう故郷の柿すだれ
船団の灘狭めけりみあれ祭
三神を迎へ湧き立つ浦祭
鳶舞へり神事果てたる秋の浜

大阪

青木朋子

福岡

野畑小百合